

パソコン文字通訳研究集会

オンライン 2020夏

講演録【一般公開版】

オンライン集会 (Zoom) & パブリック ビューイング(東京都障害者福祉会館)

開催日:2020年8月29日(土)



主催 特定非営利活動法人 全国文字通訳研究会
共催 全国文字通訳研究会 東京支部
後援 ろう・難聴教育研究会
みみより会
日本聴覚障害者コンピュータ協会



《当日の Zoom 集会画面》



(上の写真説明)

(上段左) 字幕

(上段右) 講師の画面

(下段) 手話通訳者

《パブリック ビューイングのようす at 東京都障害者福祉会館》



(コロナ対策で終了後には入念に消毒)

目 次

- 開会の挨拶
全国文字通訳研究会 理事長 長谷川 洋 1

- 発 表 – 「ウィズコロナ時代の文字通訳」
全国文字通訳研究会 大場 美晴..... 2

- 追加報告 夏季集会の“全部入り”情報保障について
全国文字通訳研究会 大場 美晴 13

- 閉会の挨拶
パソコン文字通訳研究集会 オンライン 2020 夏
実行委員長 曾根 博20

《総合司会》

全国文字通訳研究会 副理事長 宮田 和実

※筑波技術大学 若月大輔先生の講演「ウェブベース文字通訳システム captiOnline と遠隔情報保障のこれから」を含む完全版は会員限定で配布しています。詳しくは下記までお問い合わせください。

メール info@mojitsuken.sakura.ne.jp

ホームページ <http://mojitsuken.sakura.ne.jp/wp/>

開会の挨拶

特定非営利活動法人 全国文字通訳研究会
理事長 長谷川 洋

皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました、文字通研理事長の長谷川です。

今日は全国、南は沖縄から北はどこまででしょうか？ たくさんの方にご参加いただき、嬉しく思っております。

文字通研は、文字での情報保障のあり方について、聞こえない当事者の立場で研究をする会です。今年はコロナ感染が広がり、三密を避けるという意味で、オンラインでの会議や集まりが増えてきました。しかし、聴覚障害者が参加するためには、手話や文字での情報保障が必ず必要です。オンラインの集会で、それをどのようにやれば上手くいくか。いろいろ問題があるので、それを解決していこうと考えています。

今日は、幸いなことに、聴覚障害者の情報保障の専門家である若月大輔先生、captiOnline の開発者でもあります。来ていただくことができました。どのような話が聞けるか私も楽しみにしています。

また、文字通研では、大場さんが中心になって、オンラインでの集まりに参加できる人を少しでも増やそうと、毎週、Zoom で集まりを開いてきました。その中でいろいろ問題点もわかってきたので、それをまとめて発表してくれることになっています。

今日は、そうした問題について、皆さんとじっくりと話し合いたいと思っており、楽しみにしています。また、来週辺りに二次会も予定されているようです。腹を割って、いろいろ皆さんとお話をしたい。それも楽しみにしています。

今日は、よろしく願います。



ウィズコロナ時代の文字通訳

特定非営利活動法人全国文字通訳研究会

大場美晴

1. はじめに

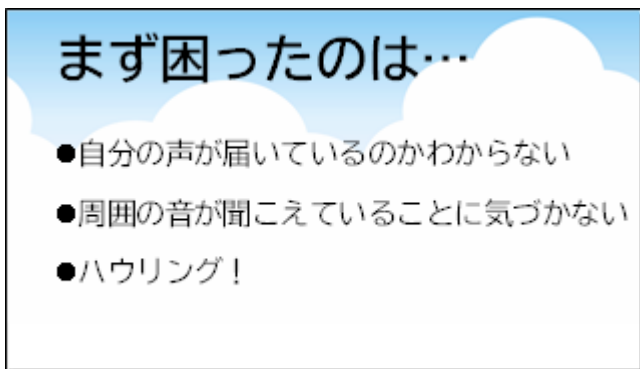


こんにちは。全国文字通訳研究会の大場美晴です。

今日は主役の筑波技術大学 若月先生の露払いとして30分ほどお話しさせていただきたいと思います。

ソフトの名前や機能の名前などカタカナ語がいっぱい出てきますがご容赦ください。こういうITの世界のことは別の言葉に言い換えると、かえって分かりにくくなるようなので、正しい名称を使ってお話しします。

きっかけはコロナ



2020年の春、新型コロナウイルス感染拡大の影響でリアルに集まって会合をすることができなくなりました。世の中はテレワーク、オンライン授業… とオンライン化が一気に進みました。進みました、というか、進んだ人は進んだ。でも、置いてけぼりの人は置いてけぼりのままという気がします。

聞こえない人と聞こえる人が一緒にオンラインでミーティングを行うとき、情報保障はどうするんだろう。

みんな、ノウハウがあるわけじゃないよね。このままではみんな取り残されてしまう。何より8月に開催する予定の夏季集会はどうしよう…。

そこで文字通研で始めたのがZoomでのミーティングでした。皆さんに教えていただきながら、ほぼ毎週日曜日に実施してきました。初めて体験するという方が多く参加してくださいました。また、入力者たちで集まってオンライン練習会も実施するようになりました。

回を重ねるごとに増えてきたのが、オンラインミーティングに参加するときいろいろな困りごとがあるということでした。また、文字通訳や手話通訳もリアルな場での通訳とは勝手が違う、課題があることがわかってきました。

遠隔で情報保障をするというのが実は何年も前から行われていました。最も利用者や支援者が多いのが教育分野だと思います。専用ソフトウェアもありますし、全国的に活動する入力者グループも複数存在します。私も教えてもらうことが多くありました。特にPEPNet-Japan＝日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワークの情報は大変参考にさせていただきました。ありがとうございました。

2. 参加の妨げになるもの

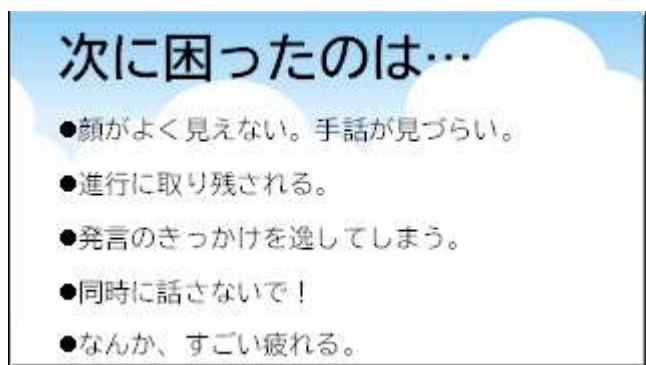
聞こえない人と聞こえる人が一緒にオンラインでミーティングを行うとき、妨げになることがたくさんありました。まず困ったのは、自分の声が届いているのかわからないんですよ。

Zoomの設定画面やWindowsのコントロールパネルなどで声がマイクに入っているかは確認できますが、相手に届いているかどうかはわかりません。

ちゃんと設定してるはずなのに、聞こえない、どうしよう…ということがよくありました。ですので発言するときに「私の声が聞こえますか？」と言ってから話し始めるという人が多くいらっしゃいます。

また、周囲で音が出ていることに気づかない。たとえば家族がテレビを見ているとか、家の外を走るバイクが走っているとか。ですので、Zoomに参加したらまずマイクをミュートに。発言するときだけオンに、というふうにさせていただきました。

あと、ハウリング。パソコンを2台持っていて2台目でZoomに入ろうとすると、どちらかのオーディオを切っておかないと(オーディオから退出しておかないと)ハウリングが起きます。



音の問題の次に困ったのは、映像です。逆光で顔がよく見えない、手話の動きが見づらいということもありました。複数の人が手を動かすと、どれを見ればいいのかわからなくなる。情報保障があっても、それだけでは十分ではないようです。

タイミングを図ることが難しく、どうしても進行に取り残されてしまいます。今、誰が話してるの？ 発言権は誰にあるの？ 自分は今、手を挙げてもいいの？ …そうこうしているうちに発言の機会を逸してしまう。なので、文字通訳者が話者名を出してくれるのはとても助かる、とのことでした。

文字通研のZoomミーティングでは必ず文字通訳や手話通訳を参加者の助け合いでつけています。チャットで情報を出す人もいます。手話で話す人もいます。そうすると、見なければいけないところがたくさんあって、かえって大変なのではないかと思います。

そんな状況になると、つい複数の人が同時に話してしまう。文字通訳者としては、やめてー！ という感じです。

進行役は必ず必要のようです。意思表示をしてもらって、指名されたら話す。この約束事が大事ですし、取り残されている人がいないように進行役がしっかり目配りしないといけないことだなと感じています。

そんな感じで、オンラインのミーティングは、リアルに顔を合わせて行うミーティングに比べて、すごく疲れるような気がします。ずっと画面を見続けているからでしょうかね。なので休憩は多めにしないといけません。今日のウェビナーでも、3時間の間に2回休憩をいれます。

(本番ではカットした話)

一方でいいこともあるよという話も聞きました。話す人がしっかり前を向いて話してくれるので口の動きが読める。これはリアルな会議ではないことですね。自分が聴覚障害者であることが周りに知られることがなくて気

持ち的に楽だというご意見でした。

入力者として気がついたこと

入力者として気がついたこと

- 利用者の様子がわからない
- 連係入力のタイミングが合わない
- チームワークがとりづらい
- 地域ごとの独自ルールの調整
- トラブル時にどうするか

遠隔で入力してみて気がついたこと、困ったことをまとめました。

まず、利用者がどんな様子なのかわからないということ。対面ならばニーズを聞いて表示のしかたや要約の加減など調整できますが、それができません。

次に、連係入力のタイミングが合わない。一時期、お笑い芸人がオンラインで漫才をしていたのを見たのですが、どうもタイミングがほんのちょっとずれてて笑えない。それと同じで、連係入力で2人の入力がぶつかってしまう頻度が多いように思います。

チームワークがとりづらい。通常のリアルな現場だと4人1組などのチームで助け合うわけですが、それがなかなかやりづらいということです。

地域ごとの独自ルールの調整。遠隔だとどこに住んでいても入力に参加できますから、ふだん自分が入力している地元のルールとは違うルールに出会うことになります。それはとても細かいことだったりするんです。たとえば改行はどうか、カギカッコはどういうときにつけるとか。そこをちゃんと調整してからでないで連係入力はうまくいきません。

また、遠隔入力だとトラブルがつきものです。通信のトラブル、マシンのトラブルなどなど。そういうときにどういう連絡手段をとるのか、バックアップ体制はどうするのか、主催者は、利用者は、通訳者同士は…。これらのことを事前にしっかり決めておく必要があるようです。たとえばZoomのほかにLINEやSkypeでつないでおくといった工夫があります。

社会的な課題

社会的な課題

- 遠隔の通訳派遣にまだ対応していないところが多い。
- オンラインならではの通訳の倫理は？
- 記録の取り扱いは？

次に、社会的な課題についてです。

オンライン会議への通訳派遣にまだ対応していない地域が多い。これは早く体制が整備されるのを待ちたいところです。

それから、リアルの場の通訳とは違ったオンラインならではの通訳の倫理が必要になってくるのではないかと思います。たとえば家族がいる場所で入力しているのか、ホントに自宅なのか。街中のカフェでも

できちゃいますからね。公共のWi-Fiを使ってもいいのか、などなど。

それから、利用者が自分のパソコンを操作しますので、自分でログを保存することができちゃいます。主催者

側があらかじめ保存できない設定にすることができますが(今日のウェビナーもそういう設定ですが)、画面を録画することだってできちゃうわけです。

利用者も入力者も、改めてオンラインならではの約束事、契約のようなものが必要になるわけで、こういったものも早く示されるようになってほしいと思っています。

ただ、逆にね、整備さえされれば、オンラインって交通費が要らないし、移動時間もなくなってコストの負担も減るので、通訳者が現地に赴かない遠隔型が増えてくるのではないかという意見もあるわけです。入力者も地域にしばられない活動が可能になりますし、これから先、どんなふうになっていくのか、私にはなかなか考えが及びませんけれども。

3. Zoom ミーティングでの情報保障のスタイル

さて、Zoomミーティングで文字通訳や手話通訳を行うには、いくつかのスタイルがあります。

文字通訳では、大きく分けて Zoom の中の機能だけを使った簡易的な方法と、専用ソフトを使ってしっかり連携入力する方法があります。



Zoom の機能には、「チャット」と「クローズドキャプション」があります。

別の遠隔情報保障システムとの組み合わせに使えるソフトは、「IPtalk(アイピートーク)」、「captiOnline(キャプションライン)」、「T-TAC Caption(ティータックキャプション)」などがあります。

①Zoom の機能「グループチャット」



Zoom で文字でコミュニケーションとるとき一番簡単なのが「グループチャット」です。チャット、つまりおしゃべり。誰でも入力できる文字によるおしゃべりです。

「チャット」というアイコンを押すだけでウィンドウが現れて、すぐに入力できます。自分で発言したいことをここに入力してもいいし、誰かの発言を誰かが入力してもいい。筆談やノートテイクのような使い方ができます。

②Zoom の機能「クローズドキャプション」



Zoom にはもう一つ、「クローズドキャプション」、つまり字幕を表示する機能があります。

表示したい人が自分で表示をオンにします。画面の下の「CC」というアイコンから「サブスクリプトの表示」をすると表示させることができます。

ちなみに先日までメニューの名称が「字幕」でしたが、バージョンアップして「クローズドキャプション」に変わりました。

この「クローズドキャプション」、画面のすぐ下に出てきますので視線移動が少ないのがいいところです。

文字の大きさは各自、Zoomの設定で小から大まで3段階に変えることができます。ただし、一度に表示できるのは3行までです。たいていは1~2行でしょうか。じっと見ていないと見落としてしまいます。

さらに困ったことに、入力できるのは一人だけなんです。ホストが指名した人に入力窓のようなものが表示されて、その人が頑張って入力する。ちょっと大変ですよ。

そこで、この後お話しする「captiOnline」の登場なんです。

Zoomへは「captiOnline」や「UDトーク」などの外部で入力したものをこのクローズドキャプションに送ることができます。「captiOnline」では連係入力できてチームで助け合えますので質の高い字幕を出すことができます。今も入力してくださっています。今日のメンバーは4人です。ありがとうございます。



この「クローズドキャプション」、ずっと見ていないと見落としてしまいますし疲れます。そこで、履歴を表示させてさかのぼって読めるようにする機能があります。

その履歴のことをZoomでは「フルトランスクリプト」、または「トランスクリプト」という名称になっています。アイコンから「フルトランスクリプトの表示」を選ぶと表示されます。

③「captiOnline」を Zoom 画面の横に並べる



Zoom ミーティングの情報保障としてもう一つのスタイルが遠隔で情報保障システム「captiOnline (キャプションライン)」をブラウザで表示して、Zoom 画面の隣に並べる方法です。

たとえば現場でIPtalkの文字通訳をスクリーンに映しますよね。あれと同じようなものが自分のパソコンのインターネットブラウザで見ることができるのです。

やり方は、主催者からcaptiOnlineのURLやユー

ザ名、パスワードが送られてくるので、クリックしてそれを入力するだけ。するとインターネットブラウザが開いて字幕が表示されます。(注：ブラウザはGoogle Chrome(グーグルクローム)が推奨されています。Internet Explorer(エクスペローラー)では動作しません)

この方法のいいところは、文字の大きさ、文字の色、背景の色など自分好みにできることです。画面左上にカーソルを当てると、うっすら三本の横線が見えると思います。これをクリックすると設定画面が出てきます。

④「captiOnline」をスマホやタブレットで見る



「captiOnline」の字幕はスマートフォンやタブレットでも読むことができます。パソコンではZoom、字幕はスマホといった使い方が結構いい感じだと思います。

主催者から送られてきたURLをSafari(サファリ)やGoogle Chromeなどのブラウザで開くのは先ほどのお話と同じです。入力が面倒なのでQRコードにして読み込んでもらうようにすると利用者は楽です。

⑤さらに高度な表示も



にすることはできません。

もし画像を合成する機材があれば、複数の画面を合成してZoomに送ることができます。たとえばこの図は手話と「captiOnline」を横に並べたものです。全員に同じものを見せたい場合はZoomで「画面共有」するといいでしょう。

ただ、この方法は、技術的にも金銭的にも主催側の負担が大きいと思います。

利用者としても文字のサイズなど自分好みの表示

4. 本日の情報保障の説明



今日の画面についてご説明します。

「captiOnline」による文字通訳の画面、手話通訳の方の画面、講師の画面、プレゼン画面。それぞれのアカウントを4つ並べているだけです。配置の並び順はZoomではコントロールできない(2020年8月現在)ので、そのときどきによって変わったりします。

「captiOnline」からZoomに送っているの、画面下の「クローズドキャプション」に同じ文字を出しています。

専用の機器を使って画面共有すればもっとスマートにもっとかっこよく合成画面を作ることができますが、今回はあえて特別な機材がなくてもできるシンプルな形でお届けしています。つまり、特別なものがなくてもこういう工夫ができますよ、とお示したかったからです。ここまででしたら、皆さんもすぐに真似していただけます。

(本番ではカットした話)

この図の左上、文字通訳の画面は、先ほどからお話している「captiOnline」を使っていますが、それを「OBS Studio(オービーエススタジオ)」というライブ配信用のソフトでZoomに表示させています。

よくYouTubeなんかでゲーム攻略の実況を流している人がいますよね。そういうときに使われているソフトだそうです。フリーソフトなのでタダです。

5. オンラインで関係入力できるソフト



入力者がオンラインで関係入力できるソフトがいくつかあります。

大きく分けると、IPTalkのように専用ソフトをインストールして使う方法、そしてウェブブラウザ上で動作するもの、この2つがあります。

代表的なものを簡単に紹介していきます。



まずは皆さんおなじみ、「IPTalk(アイピートーク)」です。

(本番ではカットした話)

リアルな現場ではハブとLANケーブルで入力者をつなぎますが、オンラインで使うときはVPN(ヴィーピーエヌ)という仮想ハブを使います。また最近のバージョンアップで「WebConnect(ウェブコネクト)」というVPNを使わない方法が追加されました。

さらに、こんなふうに透明にしてパソコン画面に表示できる機能が加わったそうです。

画像出典: IPTalk公式サイト



筑波技術大学の三好先生が開発された「T-TAC Caption(ティータックキャプション)」はウェブで動作する遠隔情報保障システムです。教育現場で多く使われているそうです。

(本番ではカットした話)

個人への貸与は行っておらず、利用するには学校や情報保障者団体として登録する必要があります。

画像出典: PEPNet-Japanホームページ



そして、本日の主役、筑波技術大学の若月大輔先生が開発された「captiOnline(キャプションライン)」です。こちらもウェブ上で動作する遠隔情報保障システムです。

(本番ではカットした話)

captiOnlineは入力者にとっては助かる機能が豊富です。たとえばFキーで文字列を出せたり前ロールを出せたりと、IPTalkに似た機能が多いので、IPTalkを使える方は迷うことなく使えると思います。

6. 手話の工夫



手話についてもお話ししておきたいと思います。表示のしかた、つまり、画角を広く、顔や手にちゃんと光が当たるようにする工夫が重要です。手の動きはゆっくり・はっきり出さないと、画面がぶれてしまって読み取れません。

(本番ではカットした話)

また、手話通訳の交代のしかたが難しいのです。手話通訳が2人いて、1人が担当している間、もう1人はカメラをオフにしています。交代するとき、どういう合図をするのか。声を出していいことにするか。そしてカメラをオフに、もう1人がオンにします。そうすると、今のZoom(2020年8月現在)では表示の位置が変わってしまいます。もしも参加者が手話通訳だけを見たいと思って「画面の固定」をしていたとしたら、固定の対象をそのたびごとに変えないといけません。

また、手話通訳側も、たとえば参加者の一人が手話で発言してその読み取り通訳をしようとしたとき、参加者が多いと誰が話しているのかわからないといったことも起きます。

そういったルールやノウハウもこれから決まっていくのかなと思います。

7. こんな工夫も

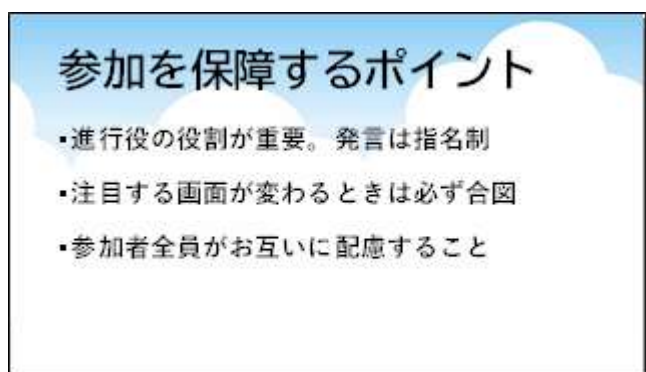


こんな工夫もありますよ、というものをご紹介します。

まず、「発言があります」「質問です」「賛成です」など、意思表示をするためのうちわを使うというアイデアです。スケッチブックでもいいんですが、うちわだとバーチャル背景を使っているときでも消えにくいようです。これは進行役としてもわかりやすく、なかなかありがたい工夫です。

また、文字通研のZoomミーティングの最後には、手話通訳・文字通訳を担当してくださった方に感謝の気持ちを表す「拍手」のアイコンを出しています。「反応」というアイコンから出すことができます。みんなで一斉にアイコンを出すと、画面に花が咲いたようでとてもいい感じです。

8. オンラインミーティングの参加を保障するポイント

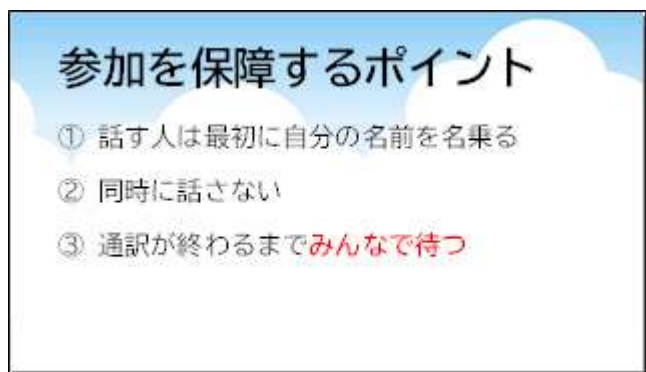


取り残される人を出さないようにするために、何が必要か、まとめました。

まず、進行役が必ず必要です。発言したい人には手を挙げるなどの意思表示をしてもらおう。指名されたら発言する。これを必ずみんなが守ることが大事です。

そして、注目する画面が変わるときは必ず合図をするということ。参加人数にもよりますが、ギャラリービューで見ている人もスピーカービューで見ている人も、特定の画面を固定して見ている人もいます。それを念頭において、必ず声や文字で合図をする時間をとることが必要です。

つまり、参加者全員がお互いに配慮するということです。



文字通研のZoomミーティングでのルールです。

- ① 話す人は最初に自分の名前を名乗る
- ② 同時に話さない
- ③ 通訳が終わるまでみんなで待つ

この「みんなで待つ」というのが大事だなと思っています。

9. まとめ



新型コロナウイルス、いつ終わるんですかね。ため息が出ちゃいます。いずれにしても、いわゆる「新しい生活様式」はしばらくまだ続くと思います。

世の中の人にはオンラインの便利さを知ってしまったので、もう後戻りしないと思います。だから今、取り残される人を出してはいけないと思うんですよね。みんながそんなふうを考えて行動したら、今とは違った明るい未来が見えるような気がします。

(本番ではカットした話)

あと、ITの世界は日進月歩で、次々に新しいものが登場しています。こういうのがほしいな、こういうのがいいなと声を上げれば、もっといい方向に向かっていくような気がしています。

以上で発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。



特定非営利活動法人全国文字通訳研究会 大場美晴

「パソコン文字通訳研究集会オンライン 2020 夏」を完全オンラインで開催するにあたり、複数の情報保障を用意し、参加者がお好みのものを選ぶように工夫をした。具体的に解説する。

※画面キャプチャーやメニュー名等は 2020 年 8 月時点のもの。この時点では「カスタムギャラリービュー」などの機能はなかった。

■当日の画面構成

文字通訳や手話通訳を含めて下図のような画面構成で提供した。



Zoom 内の機能(主催者が提供)

Zoom には、情報保障と演者、プレゼンテーションと基本的に 3~4 の画面を表示した。

文字通訳と手話通訳は常に表示されるようにし、さらに利用者がオン/オフを選べる表示を選べるクローズドキャプションを用意した。

①演者の画面 (プログラムにより交代)

- ・ Zoom のバーチャル背景を使用。
- ・ 文字通訳をスマホで読むための URL を QR コードにして表示した。

②講師のプレゼン画面 (プログラムにより交代)

- ・ Zoom の画面共有ではなく、OBS Studio を使って表示した。(OBS Studio については後述)

③文字通訳（常に表示）

- ・インターネットブラウザ上の captiOnline の画面を OBS Studio を使って表示した。
（captiOnline については後述）

④手話通訳者（常に表示）

- ・遠隔で 2 人が担当したため交代のたびにカメラをオン・オフしてもらった。

⑤字幕（クローズドキャプション）（参加者が表示を選べる）

- ・Zoom には「字幕（クローズドキャプション）」という機能があり、画面の下に表示することができる。ここに captiOnline で入力した文字通訳を流し込んだ。③の画面と同じ文字が Zoom 画面の下部に表示される。
- ・参加者は表示するかどうか選ぶことができる。「字幕」のアイコンの横の「^」マークから「サブスクリプトの表示」をクリックすると表示される。
- ・字幕の文字サイズは大中小の 3 種類あり、「サブタイトルの設定」から選ぶことができる。



Zoom の外に文字通訳を表示（参加者が各自で設定）

さらに、より読みやすい文字通訳を求める人のために、インターネットブラウザで文字通訳を閲覧できる方法を用意した。

⑥captiOnline4 による文字通訳

- ・Zoom 画面の隣にブラウザを立ち上げ、文字通訳を閲覧してもらった（これが captiOnline の本来の使い方）。
- ・表示される文字列は③と同じものだが、文字の大きさ（行数）、色、入力中の文字列を見えるようにするか隠すかの設定を各自、好みで設定できる。
設定画面は画面の左上をクリックすると現れる
- ・表示するための URL は参加登録の際にメールでお知らせした。



⑦スマホやタブレットで見る

- ・captiOnline はスマホやタブレットでも閲覧できるため、パソコンでは Zoom、手元で字幕という使い方ができるようにした。
- ・表示するための URL は参加登録の際にメールでお知らせしたほか、①の演者画面に QR コードを表示して簡単にアクセスできるようにした。

■使用したソフト

主催者が使用したソフトは、下記のとおり。有料契約の Zoom のほかはフリーソフトを使用した。



Zoom(読み:ズーム)

ウェブ会議サービス。今回は「Zoom ビデオウェビナー」で開催した。

ホストのアカウントは有料の「プロ」。オプションで「ウェビナー」を契約した。

(<https://zoom.us/>)



captiOnline4(読み:キャプションライン フォー)

遠隔地から文字通訳ができる遠隔情報保障システム。

連係入力ができることと IPtalk と操作性が似ていること、さらに Zoom のクローズドキャプションに出すことができる (バージョン 4 のみ) ことから使用を決めた。

利用者はインターネットブラウザ上に表示される字幕を閲覧することができる。パソコン、スマートフォン、タブレットでも利用可能。(<https://anasazi.info.a.tsukuba-tech.ac.jp/>)



OBS Studio(読み:オービーエス スタジオ)

無料のライブ配信用のソフト。Zoom の仮想カメラとして使用した。動画や静止画、自分の画像などさまざまなソースを組み合わせて Zoom の自分の画像として表示させることができる。

このほかにスタッフ間の緊急連絡用に Skype も用意した。

■主催者が用意したもの

各自の自宅にてパソコン、マイク、カメラ、通信環境のみ。

※特別な映像機材等は使いませんでした。

■字幕(クローズドキャプション)の設定手順

Zoomの「字幕(クローズドキャプション)」機能を使うには、Zoomで字幕の表示をスタートさせ、次にcaptiOnlineとの橋渡しをする作業を行う。



Zoom側で行うこと ※この作業はホストしかできない

①ホストはZoomを開いたら、まず「字幕」のアイコンから「私が入力します」ボタンを押す。(ここで初めて他の参加者の画面に「字幕」アイコンが現れる)



②「サードパーティのCCサービスを利用する」の「APIトークンをコピー」ボタンを押す。(長い英数字がコピーされる)

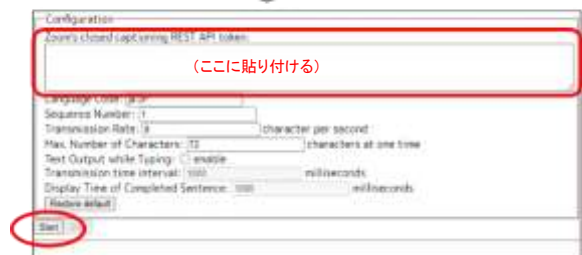


captiOnline側で行うこと ※この作業はcaptiOnlineの管理者が行う

③captiOnline4の「Client (Zoom CC)」の画面を開き、②でコピーしたAPIトークンを貼り付ける。



④「Start」ボタンを押すと入力者が入力したものがZoomに表示され始める。(一度では表示されないなので、何回か試すとよい)



■文字通訳(captiOnline)で入力者が留意したこと

ブラウザで閲覧する場合と Zoom のクローズドキャプションとでは見え方が違うため、主に改行のしかたについて留意した。

- [F12]キー（改行つき送信）は使わない。
[F12]を使うと Zoom 上で不自然な空行ができ、画面が隠れてしまうので、なるべく使わない。
- 話者名を出すときはその先の発言も一緒に出す。
通常は誰が話しているかを真っ先に伝えるため話者名のみ送信するが、Zoom 上では別々になってしまうため誰が話しているのかわからなくなる。話者名に続けて何文字か発言を入力してから [Enter] を押す。
- 句点での改行はせず、話者が変わったときのみ改行する。
Zoom 上では 3 行までしか出ないので、短く改行するとあっという間に上がってってしまう。設定項目「自動改行する文字列」には何も入れない。
- 入力部に文字をためない。
Zoom のクローズドキャプションは 3 行×全角で 22 文字、これ以上の文字を出すと 2 ページに分かれてしまうため長文をためないよう留意した。

■手話通訳者が留意したこと

Zoom では手話通訳の画面を「ビデオの固定」で大きく表示させている参加者がいることが想定される。手話通訳の画面が切り替わってしまうと見失ってしまうことになるので、交代のしかたを下記のように決めた。

- 手話通訳者が交代する際、必ず「手話通訳交代します」と声で合図する。
- 文字通訳者はその合図を必ず入力する。
- まず待機中の人ビデオをオンにする（そのときだけ 1 つ多く画面が表示されることになる）。次に、それまで通訳をしていた人が自分のビデオをオフにする。
- 講演者は交代が終わるまで話を止める。



OBS Studio について

プレゼンテーションや動画などを参加者に見せたいとき、通常は Zoom の「画面共有」機能が使われる。しかし、「画面共有」すると参加者の画面が占有されてしまい、文字通訳と手話通訳を表示させることができなくなってしまう(2020年8月時点)。そこで今回はライブ配信ソフト「OBS Studio」を使用した。

「OBS Studio」は自分で編集した映像を仮想カメラとして表出できる。

インストールすると、Zoom の「ビデオ」アイコンの中のカメラの一つとして「OBS Camera」が追加される。



表示したいもの(ソース)を複数組み合わせ、大きさや位置を調整した「シーン」をあらかじめ作成しておく。ソースは大きさや位置も自由に決めることができ、複数組み合わせることもできる。

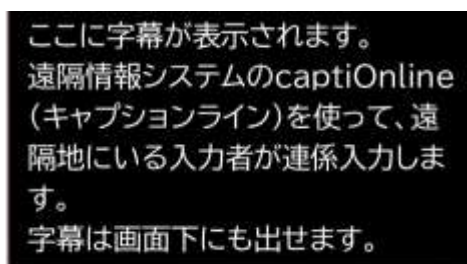
※注意：バーチャル背景を使用していると表示されない。

●表示できるもの(ソース)の例:

- ・パソコンに表示しているウィンドウ (ウィンドウキャプチャ)
- ・自分のウェブカメラ映像 (映像キャプチャデバイス)
- ・動画ファイル (メディアソース)
- ・静止画ファイル (画像)
- ・文字列 (テキスト) など

●今回の夏季集会で使用したシーン

文字通訳



インターネットブラウザ (Google Chrome) に captiOnline の閲覧モードを「ウィンドウキャプチャ」として表示させ、縦横の大きさや位置を調整した。

講師のプレゼンテーション



PowerPoint のスライドショーを「ウィンドウキャプチャ」で表示させた。

さらに「映像キャプチャデバイス」を組み合わせ、演者のクロマキー合成も行った。

開演前や休憩中に流した説明動画



Zoom の各画面の説明、設定のしかた、困ったときの問い合わせ先などを動画にして開演前や休憩中に上映した。

PowerPoint で動画 (mp4) を作成し、「メディアソース」として表示させた。

(参考)OBS Studio のインストールと設定

手順は下記のとおり。詳細は各サイトの説明をお読みください。

①下記の 2 つをインストールする。

- ・OBS Studio… <https://obsproject.com/ja/download>
- ・OBS-VircualCam… <https://github.com/CatxFish/obs-virtual-cam/releases>

②Zoom の仮想カメラとして設定する。インストールに成功すると OBS Studio のメニュー「ツール」の中に「virtualCam」が追加されるので、「Start」ボタンをクリックする。

これで OBS Studio の映像が仮想カメラに流しこまれるようになる



閉会の挨拶

パソコン文字通訳研究集会 オンライン 2020 夏

実行委員長 曾根 博

今日は「初めまして」の方も多いかと思います。夏の文字通研の集会の実行委員長を務めさせていただきました曾根です。

今回、いろいろと試行錯誤しながらのオンラインの集会となりました。結果的には、200 人を超える方にご出席頂いているようで、驚きかつ緊張しています。

本当に多くの、情報保障に関わる方々が、オンラインで会議や集会での情報保障に関心を持って下さっていることが、まず、とても嬉しいです。

文字通研では、夏集会がコロナの影響を受けることが明らかになって以来、積極的に zoom でオンライン集会を開いてきました。毎回 captiOnline のお世話になっております。これらを使いながら夏の集会をこのような形で開き、大勢の方に参加いただきまして、今までやってきたことが間違いではなかったと改めて思っています。

同時に、このような素晴らしいツールを作っていただいた若月先生のご自身からも素晴らしいご講演を頂けたことに、あらためて感謝申し上げます。

一つだけ私の感想を。今回はオンラインでの集会でした。これが、もしリアルに 200 人が集まっていたとしたら、特に聴覚障害者の社会は狭いので、おそらく皆様の中に何人かは、どこかでお会いしたことがあったでしょう。見知った顔同士「お久しぶり」「お元気でしたか」とあいさつもできます。これもこのような集会の目的のひとつだと、私は思っています。

ですが、今回はこれができませんでした。これからオンラインを利用してやっていくうえでの、1 つの課題ではないかと思っています。

最後に、お知らせが2つあります。顔が見えない問題について。二次会のようなものがないかと、今、考えております。会員の皆さんには、近いうちにメーリングリストでご連絡を差し上げることになるかと思っています。会に入っていないけれど、二次会にも参加したい方は、是非これを機会に、ご入会いただきますよう、お願い申し上げます。

それからもう一つ。最後に夏集会は、正直言いますと、毎年若干の赤字が生じておりまして、

毎回、実行委員長が矢面に立たされております。今回は更なる赤字が見込まれておりますので、投げ銭等で多少なりとも協力賜れば、ありがたいと思っています。

今回も本当に多くの方のお力添えで、なんとか夏集会を無事に開催できました。本当にありがとうございました。



パソコン文字通訳研究集会 2020 夏 講演録【一般公開版】

実行委員長 曾根 博

主催 全国文字通訳研究会

ホームページ <http://mojitsuken.sakura.ne.jp/wp/>

メール info@mojitsuken.sakura.ne.jp

FAX. 020-4624-1608

講演録編集 寺井雅子、里村徐子、長田恵、村上真理子